あの日を忘れない

東日本大震災から５年。被災地では復興事業が進み、一定の成果が生まれています。一方で、震災の記憶が薄れつつあるのも事実です。

ここでは、震災とその被害を忘れず、被災の体験を未来に生かすため、地震などの災害と日頃の備えについてあらためて考えます。

問い合わせは　**市政発信課** ☎027-898-6642

被災と復興 前橋市といわき市のつながり

前橋市といわき市は、共に中核市として災害時相互応援協定を結ぶなど交流を深めてきました。平成23年3月11日午後2時46分。いわき市を震度6弱の地震と津波が襲いました。市内では沿岸部を中心に甚大な被害を受け、7，000棟以上の建物が全壊し、1万9，000人を超える市民が避難所生活を余儀なくされました。前橋市ではこれを受け、市民ボランティアを募集。計6回にわたり約400人が被災建物や側溝の清掃・がれき処理などに当たりました。

いわき市プロフィル

いわき市は福島県浜通り地方の中心都市。寒暖の差が比較的少なく温暖な気候で、トマトなどの生産が盛んです。豊かな漁場で水揚げされる水産物は「常磐（じょうばん）もの」として首都圏でも好評。日本三古湯の一つ、いわき湯本温泉郷やスパリゾート・ハワイアンズ、環境水族館アクアマリンふくしまなどには多くの観光客が訪れます。

◀ 太陽の恵みたっぷりのサンシャイントマト

豊かな漁場で水揚げされる ▼ウニは貝焼きで

写真提供：いわき市

現在の小名浜の港

本市では、地震が発生した３月11日午後２時46分に、犠牲者への弔意を表し、防災行政無線でサイレンを鳴らします。黙とうをお願いします。

5年の時を超えて 市民ボランティアの声

震災発生後、連日報じられる大きな被害に、いてもたってもいられないと現地へ赴いた市民ボランティア。参加した海道理子さん、黒岩直治さん、品川敦さん、富澤雄二さんが、経験談などを語りました。

海道　震災後3年間、さまざまな形で活動に参加しました。特に印象に残っているのは避難所などで暮らす親子のために開催したヨガ教室です。体を動かすことで、子どもの表情が徐々に明るくなっていき、心と体のケアの大切さを実感しました。

黒岩　黙ってみていられないという気持ちで、ボランティアセンターの募集をみて活動に参加しました。震災後は天候にとても敏感になり、こまめに情報収集をするようになりました。つらい災害でしたが、この経験はとても大切だと思います。

品川　解体予定の住宅の家財道具の搬出などを手伝いました。まだ使える物でも全て処分してという家主の言葉に、災害を忘れたいという思いを感じ、やるせない気持ちになりました。活動後に地元へ戻ると、自分の住む場所の安全にも意識が向くようになりました。

富澤　現地へ行き、災害時に何に困るのかがリアルに分かりました。災害は他人事でなく、自分がその立場になったらどう行動するか、真剣に考えるようになりました。あれから5年が経ち、その記憶を忘れがちですが、今も頑張っている人がいます。一緒に頑張るという気持ちを忘れないようにしたいと思います。

▲（右から）黒岩さん、品川さん

▲（左から）富澤さん、海道さん、ボランティアセンター久保原さん

災害から得た教訓を将来に生かす

震災で受けた被害は甚大でしたが、そこから得られたものもあります。

市民がボランティアとして現地に赴き、さまざまな体験をしたことは、被災地の人々だけでなく、活動に参加した人にとっても災害への備えの大切さを認識するきっかけとなりました。

災害から得た教訓を忘れずに未来へつなぐこと。それが、今を生きる私たちの役割だと認識し、いざというときに備える必要があるのかもしれません。

前橋×いわき 交流職員インタビュー

前橋市といわき市は、災害派遣事業として相互に職員を派遣しています。

前橋での経験を復興に役立てたい

こちらでは市民活動の支援をしています。前橋は気候が激しいですが、自然豊かで何をするにも便利ですね。いわきに帰るたび、緩やかながらも復興を感じます。前橋の皆さんの支援はとてもありがたいです。こちらで培ったことを生かし、いわき市の復興に役立てたいです。

生活課
鈴木 規睦

いわき市農政課
石田 貴志

できる範囲で継続的な支援を

現在は市内で生産された野菜などの放射性物質のモニタリング検査を担当しています。震災の爪痕は大きいですが、復興事業で一定の成果も生まれました。ただ、震災の風化という新たな問題も発生しています。継続的な支援で、被災地の復興を応援してほしいと思います。